ありときのこ

宮沢賢治

苔いちめんに、霧がぽしゃぽしゃ降って、蟻の歩哨は鉄の帽子のひさしの下から、するどいひとみであたりをにらみ、青く大きな羊歯の森の前をあちこち行ったり来たりしています。

向こうからぷるぷるぷるぷるぷる一ぴきの蟻の兵隊が走って来ます。

「停まれ、誰かッ」

「第百二十八聯隊の伝令！」

「どこへ行くか」

「第五十聯隊　聯隊本部」

歩哨はスナイドル式の銃剣を、向こうの胸に斜め

につきつけたまま、その眼の光りようや顎のかたち、それから上着の袖の模様や靴のぐあい、いちいち詳しく調べます。

「よし、通れ」

伝令はいそがしく羊歯の森のなかへはいって行きました。

霧の粒はだんだん小さく小さくなって、いまはもう、うすい乳いろのけむりに変わり、草や木の水を吸いあげる音は、あっちにもこっちにも忙しく聞こえだしました。さすがの歩哨もとうとうねむさにふらっとします。

二疋の蟻の子供らが、手をひいて、何かひどく笑いながらやって来ました。そしてにわかに向こうの楢の木の下を見てびっくりして立ちどまります。

「あっ、あれなんだろう。あんなところにまっ白な家ができた」

「家じゃない山だ」

「昨日はなかったぞ」

「兵隊さんにきいてみよう」

「よし」

二疋の蟻は走ります。

「兵隊さん、あすこにあるのなに？」

「なんだうるさい、帰れ」
「兵隊さん、いねむりしてんだい。あすこにあるのなに？」
「うるさいなあ、どれだい、おや！」
「昨日はあんなものなかったよ」
「おい、大変だ。おい。おまえたちはこどもだけれども、こういうときには立派にみんなのお役にたつだろうなあ。いいか。おまえはね、この森をはいって行ってアルキル中佐どのにお目にかかる。それからおまえはうんと走って陸地測量部まで行くんだ。そして二人ともこう言うんだ。北緯二十五度東経六厘の処に、

目的のわからない大きな工事ができましたとな。二人とも言ってごらん」

「北緯二十五度東経六厘の処に目的のわからない大きな工事ができました」

「そうだ。では早く。そのうち私は決してここを離れないから」

蟻の子供らはいちもくさんにかけて行きます。

歩哨は剣をかまえて、じっとそのまっしろな太い柱の、大きな屋根のある工事をにらみつけています。

それはだんだん大きくなるようです。だいいち輪廓のぼんやり白く光ってぶるぶるぶるぶるふるえている

ことでもわかります。

にわかにぱっと暗くなり、そこらの苔はぐらぐらゆれ、蟻の歩哨は夢中で頭をかかえました。眼をひらいてまた見ますと、あのまっ白な建物は、柱が折れてすっかり引っくり返っています。

蟻の子供らが両方から帰ってきました。

「兵隊さん。かまわないそうだよ。あれはきのこというものだって。なんでもないって。アルキル中佐はうんと笑ったよ。それからぼくをほめたよ」

「あのね、すぐなくなるって。地図に入れなくてもいいって。あんなもの地図に入れたり消したりしていた

ら、陸地測量部など百あっても足りないって。おや！引っくりかえってらあ」

「たったいま倒れたんだ」歩哨は少しきまり悪そうに言いました。

「なあんだ。あっ。あんなやつも出て来たぞ」

向こうに魚の骨の形をした灰いろのおかしなきのこが、とぼけたように光りながら、枝がついたり手が出たりだんだん地面からのびあがってきます。二疋の蟻の子供らは、それを指さして、笑って笑って笑います。

そのとき霧の向こうから、大きな赤い日がのぼり、羊歯もすぎごけもにわかにぱっと青くなり、蟻の歩哨

は、またいかめしくスナイドル式銃剣（しきじゅうけん）を南の方へ構（かま）えました。

底本：「セロ弾きのゴーシュ」角川文庫、角川書店
　　１９５７（昭和32）年11月15日初版発行
　　１９６７（昭和42）年４月５日10版発行
　　１９９３（平成５）年５月20日改版50版発行
初出：「天才人」
　　１９３３（昭和８）年３月号
※初出時の表題は「朝に就ての童話的構図」。
入力：土屋隆
校正：砂場清隆
２００７年１月６日作成
青空文庫作成ファイル：